

---

# 現代妖怪図鑑

腐れ大学生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現代妖怪図鑑

### 【Nコード】

N0670M

### 【作者名】

腐れ大学生

### 【あらすじ】

現代に生きる妖怪に対する基本的な知識を身につけ、その危険性を喚起することにより、諸兄らに日常での注意を怠らないようにして頂き、妖怪の悪戯の被害者を少しでも減らそうと思い筆を執った次第である。

## 序章

現代の妖怪図鑑を作ろう。

そう思い立つたきつかけはようやく冬將軍が退陣し、世の中が春という季節を受け入れたある日に起こった。私にとっては悲劇であったが、諸兄らにとってはおそらく喜劇であるだろう。

その日、私こと佐野征十郎は近所の商店街の店々を冷やかすのに余念がなく、世間の生命出ずる春とは正反対の泥沼のような青春を謳歌していた。

当日の大学における講義は全て自主休講である。日々深遠なる思索にふける私には、このぐらいの休息は当然の権利といえよう。

しかし、天は何を勘違いしたのかこの考える輩たる私に天罰を与えたのである。

前方から自らが高等学校の生徒であることを示す制服で武装した乙女が歩いてくる。

紳士足る私は当然彼女をいやらしい目で見ることもなくすれ違おうとしたのだが、そのとき唐突に一陣の風が吹き抜け、彼女の武装の一部をめぐりあげた。

具体的に言えば、スカートの内側が衆目に晒されたのである。私の眼差しが一点に釘付けになったのも不可抗力と言えよう。

しかし、彼女はどうかやらそうは思わなかったようで私は彼女から手酷い罵倒を受けることになった。あまりに理不尽である。

先ほどの風は私に対して悪意を持っていたと断ぜざるを得ない。さらに、ここで思考を止めないのが私の私たる所以である。果たして自然現象である風が悪意など持つものか。さすがの私も自然を

敵に回すほど環境破壊を進行させているわけではないはずである。

では人為的なものか？

妄想は膨らむ。

否、いかな人間とてあのような風を狙って起こすのは不可能だろう。

ならば結論は…

「妖怪だな」

古来より人に害なすものと言えば妖怪と相場が決まっている。それに妖怪ならば、風くらい朝飯前に吹き荒れさせることができるだろう。

勝手に下した結論に勝手に満足した私の脳裏にひとつの懸念が生じた。

現代人はあまりに妖怪に対して無防備なのではないか。まさかこの科学の世において妖怪などという存在に自分が襲われるはずがないと、思い込んでいるのではないかと。

由々しき事態である。

私はせめて自分の守りだけでも固めようと、商店街からの帰路の脇にあった祠からいわくありげな札を引きはがし、その札を我が家の玄関に張り付けたのであった。

## 序章（後書き）

初めて投稿させていただきました、腐れ大学生と申します。  
稚拙な文章ではありますが、楽しんで読んでいただければ幸いです。

## 陰章之一

丑三つ時。私は玄関の扉が連打される音で目を覚ました。

このような時間に訪ねてくるようなやつは妖怪か幽霊か、はたまた新聞の勧誘かNHKの集金に違いない。私は居留守を用いることにした。

三十分後。訪問者は我が家の扉を叩き続けている。親の仇か何かなのだろうか。

このままでは私は安眠できない。それに我が家の玄関がそろそろ耐久力の限界を迎えるかもしれない。

ここでひとつ我が家を紹介しておこうと思う。私が現在下宿しているのは大学近辺に存在する山月荘という名のボロアパートである。正確なことはわからないが、その外観からして少なくとも築八十年は超えているだろう。

建物は二階建てで、私の部屋は一階の左端に位置している。私の部屋は六畳で、キッチンとトイレは完備されているが風呂は存在しない。

夏場は風通しがよく涼しいのだが、冬場はまだ外のほうが暖かいのではないかと大学の友人に評されるほどに寒い。しかも歩くたびに部屋の床が嫌な音を立てる。底を抜かさないために、私は我が家の内ですら抜き足差し足を余儀なくされている。

なぜ私がそのような廃屋寸前のアパートに下宿しているのか。理由は一つ。家賃が安いのだ。

具体的にいえば月千円である。この破格の値段はこの大家が私の実家と縁があるとかいった理由があるのだが、どうでもよいので省く。

話が逸れすぎた。

以上から現在の状況を想像してほしい。玄関前の訪問者が行っていることは、八十歳を超える老人を三十分間叩き続けていることと同義である。大惨事である。敬老の精神のかけらもない。

それも扉の叩き方が徐々にリズムカルになってきている。訪問者は我が家の玄関で作曲を行うつもりらしい。無駄にうまいのが腹が立つ。

このままでは玄関が伝説の曲が生まれた場所として、世界中のアーティストの聖地となってしまうかねない。そうならば安眠はなお不可能である。

そう判断した私はようやく重い腰をあげ、玄関の扉を開いたのだ。 った。ちなみにチエーンだとかそういったものは一切ない。自分の身は自分で守るしかないのだ。

果たしてそこに立っていたのは、一人の少女であった。なぜか浴衣を着ていて頭の側面に狐の面をひっかけていることを除けば、至極見目麗しい普通の少女である。

少女は当初の目的を忘れて作曲に夢中になっていたらしく、私が玄関を開くと鬼が豆鉄砲をくらったような顔をして飛びのいた。構わず要件を問うことにする。

「このような時間に何の用か。交際の申し込みと嫁入り以外の用件ならば、断固として拒否させていただきます。壺も絵も買わん。」

少女はようやく正気に戻ったらしく、気の強さを示すような切れ長のつり目を輝かせて言い放った。

「佐野様がそうお望みになるのならば、喜んで交際でも、嫁入りでも、悪徳商法でもさせていただきます。」

この少女、奇妙なのは格好だけではないらしい。口調は妙に慇懃であるし、発言の内容も「男が人生で一度は言われてみたい言葉ランキング」にランクインしそうなものである。

「どういうことだ。いったい何が目的だ。金ならないぞ。」

「お金などいりません。私は恩返しに参ったのです。」

まずまず訳がわからない。私は恩を売られることはあっても、断じて他人に恩を売るような真似はしない。情けは人のためならず。

「佐野様、情けは人のためならずは情けをかければそれはいずれ巡り巡って自分に返ってくる、という意味です。」

どうやら口に出ていたようだ。しかしこの少女、内容はともかく口調はしっかりとしているし、頭が残念な人物ではないようだ。

「恩返しとはどういうことだ。私はまず貴君のことを知らないぞ。」

「知らぬのも無理はございません。私はあなたが札をはがした祠に封じられていた狐ですから。直接お会いするのはこれが初めてでございます。」

思わず玄関に目を向ける。確かに私は昼間、そこにいくもありげな札を貼った。だがあの祠から札をはがしたとき、周囲には誰もいなかったはずである。背を冷や汗が伝う。

「言いたいことはわかった。だが貴君が狐であるなどとは信じられぬ。証拠を見せよ。」

「わかりました。」

人が狐を騙っているのならば、証拠を見せよなどと言われたら多少なりともひるむはずである。しかしこの少女は「わかりました。」と即答した。全身を鳥肌が覆う。

少女は頭の側面につけていた狐の面を被った。私は拍子抜けした。まさかこれで正体を見せましたなどというつもりなのだろうか。

「これが私の真の姿です。」

言うつもりだったようだ。恐怖から解放され、安堵のため息をつこうとしたとき私は見た。見てしまった。

仮面が、まばたきを、している。

「私が狐であると信じていただけでしたか。」

「それは、その、トリックの類ではないのか。」

「まだお疑いですか。わかりました。では私の顔を横から見てください。触れてもかまいませんよ。」

仮面と顔の継ぎ目がなかった。思わずその頬に手を伸ばしたが、仮面と思われていた部分からは確かに体温が感じられた。ここまで非現実的なことに見舞われると、人はむしろ冷静になるものである。

「わかった。貴君が狐であることは信じよう。ところで、貴君は私に危害を加える意思はないのかな。」

部屋の中に妖怪相手に立ちまわれそうなものは、ない。

「無論、恩人に危害を加えるほど墮ちてはおりません。先ほども申し上げたように、私は恩返しに参ったのです。さあ、なんなりとお申し付けください。」

ひとまず安心、だろうか。危害を加える意思がないと分かれば後は体よく帰っていただけた。日々を過ごすだけで精一杯だというのに、この上超常のものと関わってたまるか。

「ああ、恩返しの前にお問い合わせがあるのですが、私をここに住まわせていただけませんか。」

なんと。退路を断たれてしまった。

「何故だ。札をはがした程度のことならば気にしなくてよい。早く封じられる前に住んでいた場所へと帰るがよいだろう。」

「そうはいかなくなつたのです。私は封印が解かれた後、真っ先にかつて住んでいた森へと向かいました。しかし時すでに遅く、私の住居は人間による開発の憂き目にあつていたのです。もはや私に帰るところはございません。どうかここにおいてください。」

そう言つて顔を伏せた狐を見て、私は考える。この者の住居がなくなつたのは私のせいではないにしろ、少なくとも人間のせいではある。ならばこの狐を救済すべきなのもまた人間なのではないかと。弱々しい狐の姿を見ているうち、不思議と恐怖は消え失せていた。

「よかるう。一生、というわけにはいかぬが、新しい住居が見つかるまでここを貴君の住処とするがよかるう。その代わり、家事をしてもらうぞ。風呂もないぞ。」

狐が顔を上げる。狐は泣いていた。

「有難うございます。このご恩は一生忘れません。」

「恩など感じずとも好い。春とはいえこの時間はまだ寒いだろう。家にかかるとうい。」

そうして我が家に居候が増えた。しかしここで解決せねばならない由々しき問題が発生する。

「生活費、ですか。」

「ああ、現在の我が家の財政は私一人を養うだけでも大変なほどのだ。この上さらに一人増えたとなれば、財政破綻の一途をたどることとなる。」

「少なくとも私に食費は必要ありませんよ。食糧くらい自分で調達できますから。雨風しのげる場所があればよいのです。」

なるほど、それならば今までとさほど変わらぬ生活費で日々を繋げるかもしれぬ。

「しかし、佐野様の将来のためにもお金はあるに越したことはございません。ぜひとも今のうちに稼いでおきましょう。がっぽりと。」

一理ある。金はいくらあっても困ることはない。生きるということはとかく金がいるのだ。

「良い方法を知っているのか。」

「それをこれから考えるのです。」

「何だ、貴君は妖怪であるからして、何か妖怪らしい方法で簡単に金を稼げるのではないのか。」

「私は頭脳派ですので、術の類は苦手なのです。せいぜい木の葉を野口英世に変えるぐらいがやっとなのです。」

「福沢諭吉ではないのか。」

というより通貨偽造だ。まだ私の人生設計に檻に入る予定はない。

「では早速その頭脳とやらを働かせてくれ。できるだけ肉体労働を伴わないものが良い。私も頭脳派なのでな。」

「では、本などお書きになってはいかがでしょう。当たりさえすれば、後は黙っていても印税がつぼがつぼです。」

この狐、長年封印されていた割に随分と考えが世俗染みている。

「しかしそう簡単にいくのなら、人口の八割は物書きをしているだろう。そうでないということは、簡単にはいかぬ職業であるということだ。」

「佐野様、物書きで売れっ子になるためには、誰も体験したことがないような面白おかしいことをつらつらと書きつづるのが一番の近道であると私は考えます。それが日常で役立つことならさらに良い。」

「確かにその通りであるが、私は人よりも面白おかしい人生を歩んでいるつもりはないぞ。」

私の日常を書いたところで、せいぜい折り鶴にされて病床の美少女の枕元に置かれる程度であろう。悪くない。

「佐野様、灯台下暗しとは正にこのこと、貴方様の目の前にいるのは一体何ですか。」

盲点であった。確かに目の前にはこれから我が家に住み着く予定

の狐がいる。世界中のどこを探しても、妖怪と同居している人間はなかなかいないだろう。まさしく誰も体験したことがない、面白おかしい状況である。

「さらに言うならば、佐野様は既に私という怪異と関わってしまった。一度怪異に遭ってしまったものは後々も遭うようになるといわれます。」

「それは喜んでよいのか。」

「本に書くネタが向こうからやってくると考えればよいのです。」

「つまり売れっ子になるための条件の一つは満たしているわけだ。後はいかにして私の書を世間の人々の日常に役立たせるか、だ。」

そのとき脳裏によぎったのは昼間の忌まわしき出来事である。そのとき考えたことは、現代人は妖怪に対して無防備すぎるのではないか、ということだ。

「現代の妖怪図鑑を作ろうと思う。」

「図鑑でございますか。それは又何故。」

「現代人はあまりに妖怪に対して無防備すぎる。そのような状態でもし妖怪に襲われたらひとたまりもないだろう。だが、その時手元に現代の妖怪に対する対策が書かれた本があったとしたらどうだろう。」

「なるほど、佐野様はおそらくこれから多くの怪異を経験なさるでしょうから、妖怪の情報は非常に正確なものとなるでしょう。ならばその対策も容易に立てられるというものです。これなら人々の役にも立つ。素晴らしいお考えです。」

「そうだろう。これならば世間の人々を妖怪の被害から守ることができ、私は印税でがっばがっばである。」

正に一石二鳥。何やら明るい展望が見えてきた。どうやら私の将

来は薔薇色らしい。

「では今後の方針も決まったところで、そろそろ眠るとしよう。」  
「そんな。もう少しお話ししようよ。長い間話す相手がいなくてフラストレーションが溜まっているのです。」

「貴君は自分が何時に訪ねてきたか理解しているのか。頭脳派が聞いてあきれる。」

現在時刻午前四時。忘れてはいけない。今は深夜なのである。

## 陽章之一

「なあ貴君、貴君は妖怪であろう。」

靈柩車の運転席に座る男が心底哀れんだ眼を私に向けてくる。

しかし私はくじけない。なぜなら私は人々を妖怪たちの魔手から救い出すという重大な使命を担っているからだ。ついでに印税も入ればなおよい。

狐が我が家にやってきた翌日。私は妖怪図鑑のネタを探すために町をうろつくことにした。

狐曰く、「ぶらぶらしていればそのうち怪異に行き会いますよ。」

適当なことこの上ない。

しばらく歩くと、葬儀場が見えてきた。どうやら今日は葬儀が行われているらしい。喪服に身を包んだ人々がちらほらといるのが見える。

葬式というのは、死者のためのものではなく残された遺族のための儀式であると聞いたことがある。儀式を通じて、もはやあの人はこの世にいないのだと確信するための儀式。一種のイニシエーションなのである、と。

だが、私は葬式は生者だけのためにあるとは考えない。それはまぎれもなく、死者のためにもなっているからだ。なぜなら生者が死んだ者を既にこの世にいないと確信することは、死者がこの世に未練を残さないために重要なことであるからだ。

魂というのは繊細なもので、肉体という鎧に包まれていなければ、この世に存在しているだけで汚れを蓄積していく。未練を残して魂

だけでこの世に留まれば、魂は汚染されてしまつて輪廻の輪に加わること叶わず、成仏できなくなつてしまふかもしれない。

つまり、葬式とは死者を成仏させるための手助けにもなっていると、私は考える。

葬儀場から棺桶が運び出される。どうやら随分と長い間立ち止つていたようだ。

棺桶を運びこむ霊柩車、その運転手を見たとき私は予感した。

あれは人ではない。そしてその性質からあれが何であるかも分かつた。私は霊柩車へと足を向けた。冒頭に戻る。

「なあ貴君、貴君は妖怪であらう。」

「はあ。大丈夫ですか。これは霊柩車であつて救急車ではありませんよ。頭の病院には参りません。」

頭の残念な人呼ばわりをされてしまった。妖怪の分際で生意気な運転手は呆けた顔をしているが私は騙されない。死体を守るためにもここで逃がすわけにはいかないのだ。助手席に乗り込む。

「ちょっと、何の真似ですか。あなたは遺族の方なのですか。」

「否、遺族、縁者、近所のお兄さんのいずれでもない。後ろの仏とは赤の他人だ。だが赤の他人とは言え、妖怪の餌食になろうとしているのを見過ごすわけにはいかぬ。」

「訳のわからないことを言っていないで、早く降りてください。これから火葬場へと向かわなければならぬのです。」

むう。まだ認めようとしなないか。ならばひとつ正体を言い当ててやるとしよう。

「貴君はおそらく火車だろう。」

火車とは罪人の死体をさらうと謂われる妖怪である。その名の通り火のついた車輪を駆った姿をしている。ちなみにさらった死体は灼熱地獄の業火に放り込んで、地獄の業火を維持するための燃料としているらしい。

「霊柩車の運転手とは、火車の性質そのものである。葬儀場から死体運び、火葬場にて焼く。運転手たちの中に火車が紛れ込んでいても何ら不思議はない。どさくさに紛れて死体をさらおうとしているのだな。」

「待って下さい。暴論です。私は妖怪なんかじゃありません。この死体だって、間違いなく火葬場まで運ぶつもりです。一体何を根拠にそのようなことを仰るのですか。」

しづめといやつだ。まだ認めようとしなない。私はさらに運転手を問いつめようとして、そこで異変に気付いた。

いつの間にか車が走っている。それに周りの景色もなんだかおかしい。黒々とした尖った岩がそこかしこに立ち並び、ところどころにある窪みには赤い液体溜まっており、その表面はまるで沸騰しているかのように泡を吹く。その景色はまるで地獄の様相を呈している。

「運転手、これは明らかに尋常のことではない。貴君が本当に人間だというのなら即刻引き返すべきだ。早く戻ろう。」

「尋常でないのは当たり前。ここは地獄なのですから。それに言っただでしょう。死体を火葬場まで運ぶ、と。」

こいつ本当に火車であつたのか。話しているうちに間違っているのは私な気がしてきて、いかにして病院に連れて行かれる前に逃げるかを考え始めていたというのに。

「貴様、今すぐに私と死体を現世に返せ。このようなことが許されると思っているのか。」

「罪人の死体など、どうだって良いではないですか。後ろの仏は酷いやつですよ。生前に動物を虐待していたのです。それにこれはもう空っぽです。魂の抜けた、ただの器ですよ。」

「ふざけるな。私は知っているぞ。火車にさらわれ、地獄の業火でその肉を焼かれた者の魂は、永劫灼熱地獄に囚われ責め苦を味わい続けねばならんだ。いかに罪人といえど、永劫の苦しみを受けようとしているのを看過することはできん。」

私がそこまで言ったとき、火車は不意に黙り、そして私に寒気のような嫌な笑みを向けた。嫌な予感がする。

「わかりました。そこまで仰るのなら、後ろの死体は予定通りの火葬場へと運びましょう。ただし、条件があります。」

思わず唾を呑みこむ。

「条件とは、何だ。」

「あなたが死体の代わりに燃えるのです。」

馬鹿な。私はまだ生きている。

「生きていようと、死んでいようと、そんなことは関係ありません。万物一切地獄の業火に放り込めば、素敵な燃料となるのです。」

「待て、私は罪人ではないぞ。そんなことをしては閻魔に怒られるのではないか。」

「罪人を燃やすのは、罪がこびりついた死体のほうが、より良い燃料になるからです。ですが私が指示されているのは、人間を一人放

り込め、ですからノルマさえ果たせば、私にとっては燃えるのはあなただろうが死体だろうがどちらでもよいのです。」

いつの間にか車は崖の突端のような場所に出ていた。地面はほとんど車の幅しかなく、車から降りようとすればそのまま真つ逆さまといった具合だ。思わず下を覗き込むと、そこにはただ圧倒的な熱量を持った赤が広がっていた。

「すごいでしょう。おそらく生者でここへ来たのはあなたが初めてですよ。おめでとございます。さようなら。」

助手席のドアが勝手に開く。タクシーか。

火車が私の体を蹴り、灼熱地獄へ放り込もうとする。妖怪だけあって、その力は強い。私は車の天井についている持ち手に掴まって必死に耐える。日頃から体を鍛えていなかったことが悔やまれる。

「おいよせ、暴力はやめろ。私は痛いのと熱いのが大嫌いなのだ。」

「ご安心ください。地獄の業火ならば熱いと感じる間もなく燃え尽きるができますよ。まあ死後にたつぷりと責め苦が待っています。」

「待て、話し合おう。交換条件だ。見逃してくれば、私の財布を貴君に渡そうではないか。」

「どうせ子供銀行券くらいしか入っていないのでしょ。お断りです。」

失礼なやつだ。さすがの私でも赤銅の硬貨くらいは持ち合わせている。しかし、まさか妖怪が斯くも恐ろしいものであったとは。今後は気をつけよう。

「話し合うことなどありません。それにあなたに生きていられると

私が困るのです。もしあなたが私が火車であると世間に広めれば、仕事がいや辛くなる。もしかしたら職場を首になるかもしれない。妻子を路頭に迷わせるわけにはいかないのです。」

結婚していたのか。なんとなくやましい、どこまでも腹の立つ奴め。そう思ったところで私はついに力尽き、持ち手を手放してしまっただ。

「さようなら。約束通り、後ろの死体は予定通りの火葬場へ運んでおきますよ。だから安心して燃え上がってください。」

私は断末魔の叫びをあげながら、万有引力の法則に従い、広大な赤へと落下していった。

## 陰章之二

「おかえりなさいませ、佐野様。」

同居人の狐が出迎えの声をかける。私は返事をするほどの元気がなかったので、首を縦に振って応えただけだった。

私がせんべいのごとき薄さの座布団を枕として寝転がろうとしていると、狐が再び声をかけてきた。

「これは、私が問うてよいことなのかどうか、迷ったのですが。」

なぜか頬が赤みを帯びている。

「何だ、言ってみろ。」

狐はそれでも口ごもる。よほど言いづらいことなのだろう。しばらく私の顔を見つめた後、ようやくこう問うた。

「何故、全裸のですか。」

ああ、そういえば帰るのに必死で自分が全裸であることを忘れていた。よく通報されなかったものだ。しかしこの狐、私の裸なんぞで頬を染めていたのか。私の何倍も生きているだろうに、以外と初心なやつだ。

「これにはやむを得ぬ事情があるのだ。だから受話器をおけ。この件に警察を介入させるのはあまりに早計だ。」

「ならば早くその事情とやらを説明してください。ポル野様。私はあなたに嫁入りする覚悟すらありましたが、露出癖の変態を伴侶と

する覚悟まではありません。まずはその趣味を矯正してさしあげます。これもまた恩返し。」

誰がポル野だ。私は佐野だ。しかしこれは不味い。狐の指が電話機の番号の1と0の間を高速で行き来している。イメージトレーニングは大切であるが、今回ばかりは私にとって都合が悪い。早急に事情を説明せねばなるまい。一難去って、また一難。

「実はな、火車に灼熱地獄に連れて行かれ、地獄の業火に放り込まれたことにより服が焼けてしまったのだ。」

電話機の番号を押したことを示す電子音が部屋に響く。とっさに電話線を引きぬいて事なきを得る。狐は電話の仕組みをまだ十分に理解してはいらしく、繋がるはずもない受話器に呼びかけ続けている。阿呆め。頭脳派が聞いてあきれる。

しかしなぜ警察の呼び方は知っているのだ。よくわからない狐である。

「信じられないのもわかる、だが事実なのだ。受け入れてくれ。」  
「私はそれよりも、目の前の現実を受け入れたくありませんよ。わかりました、もういいです。信じますから早く服を着てください。」

どうやら信じてもらえたようだ。言葉が投げ遣りだった気がしなでもないが、信じてもらえたことにしよう。とりあえず服を着る。

「そういえば、先ほど火車と仰いましたね。ということは妖怪には会えたんですね。」

「うむ。見てくれは完全に人間であったが、間違いなくあれは火車であった。それも子持ちの火車であった。さっそく妖怪図鑑の執筆に取り掛かろうと思う。」

「お待ちください。」

なぜ止める。そう思って狐の顔を見ると、なにやら偉そうな、どこかやりきったような顔をしている。頬を引っ張ってやりたい。

「何だ。服ならもう着たぞ。」

「その話はもうやめてください。次はありませんよ。図鑑の執筆を始める前に夕食にしましょう。私が作ったのですよ。私が。」

確かに、キッチンでは鍋から何やらが煮える音がする。家事をしるといったのは半ば冗談であったのだが、まさか本当にするとは。なかなか将来有望な狐である。

「ふむ、では先に夕食を頂くとしよう。ちなみに何を作ったのだ。」

「油揚げの味噌汁でございます。」

得意げな顔。少し間を置くことにする。このとき私は、狐が夕食のメニューの続きを言うこと期待していた。期待は打ち砕かれた。

「どうしたのですか。鳩が鉛鉄砲を喰らったような顔をしておいでですよ。」

「おそらくその鳩の頭は吹き飛んでいるだろうから、私がどのような表情をしているのか皆目わからん。それより、夕食は味噌汁以外にないのか。」

「はあ、ございませんが。」

「その心底訳が分からない、と言いたげな表情をやめろ。夕食を作ってくれたことはうれしいが、さすがに味噌汁だけでは不味いと感じてくれ。」

まあ、人と人以外との間では常識も違う。今回は家事を教えてお

かなかった私が悪い。

「わかった。家事は今後きつちりと教え込むこととしよう。とりあえず味噌汁だけでも食うから、持ってきてくれ。」

「かしこまりました。」

狐が碗に味噌汁をよそう。台所に立つその姿は中々様になっており、不覚にも見とれてしまった。

「どうぞお召し上がりくださいな。」

「ああ、ありがとう。」

味噌汁の出来栄を見る。恐ろしく透明度の高い液体の上に油揚げが浮かんでいる。ここまで透明な味噌汁は見たことがない。というより味噌汁ではない。ただの湯に油揚げを浮かべたものである。

「貴君、さっき今日の夕食は味噌汁であるといったな。まず味噌汁とは何か、答えてみよ。」

「はい、味噌汁とは熱い液体に好きな具材を叩きこんで、煮たものです。」

「ちなみにそれは誰から聞いたのだ。」

「堀田様、という方です。佐野様の御学友であると仰っておられました。昼頃訪ねていらして、右も左もわからず、困っていた私を手助けしてくださったのです。買い物の仕方も教えていただきました。」

奴か。道理で味噌汁の作り方に悪意が見え隠れするはずだ。

「今後は私がいなるときに誰か来ても、扉を開けないように。堀田が来たら酷く化かしてから追いつ返すこと。味噌汁には味噌を入れる

こと。わかったな。」

「あの、味付けが不味かったのでしょうか。堀田様からは愛情こそが最高の味付けになると聞いたので、油揚げに対する愛情を、溢れんばかりに詰め込んだのですが。」

私に対する愛情ではないのか。油揚げへの愛情が詰まった湯を食し、私はどういった反応を示せばよいのだろう。

「申し訳ありません。私は家事も満足にできぬ駄目な狐でございます。こんな残飯は即刻処理いたします。」

「待て、食わぬとは言っていない。むしろ食べさせてくれ。文句ばかり言つてすまなかった。」

そんなに落ち込んだ顔をされては食わざるを得ない。それに、せっかく作ってくれたのだ。何より下宿を始めてから誰かが飯を作ってくれていているなどということはなかった。心底うれしくはあるのだ。

「わかりました。それでは口を開けてください。」

「待て、何をしようとしている。」

何故か狐が箸で油揚げをつまみ、私の眼前へと持ってくる。

「先ほど食べさせてくれ、と言ったではないですか。さあ、早く口を開くのです。」

「そういう意味で言ったのではない。ちゃんと自分で食う。」

狐から箸を奪い取り、油揚げをかきこむ。特に味はしなかったが、暖かった。

「御馳走様。時に、貴君は食べないのか。油揚げは好物なのだろう。」

「私は既に何匹か食べておりますから。満腹なのです。それに、佐野様のお金で買ったものを、私が食すわけにはいきません。」

「律儀なやつだな。しかし、同居人がいるというのに食卓を囲めないというのは少々寂しいものがあるぞ。」

「では、食卓で鼠を食べてもよろしいのですか。生で。」

想像してみる。食卓の上で開催される鼠の解体ショー。確かに、食事をしながら眺めたい光景ではない。

「そうだな、食卓を囲むのはあきらめよう。だが、生活に支障のない範囲ならば菓子のような嗜好品を買ってもよいのだぞ。」

「有難いお言葉です。では、今後はほんの少しだけ甘えさせていただきます。」

「うむ、我慢しすぎるのはよくないからな。」

夕食後、狐は慣れぬことばかりで疲れてしまったのか。眠ってしまった。そつと布団をかけてやる。ひと段落ついたので、妖怪図鑑の執筆に取り掛かる。

## 現代妖怪図鑑 項目ノ一 火車

現代における火車は、人に化けて霊柩車の運転手をしている。葬儀業者から派遣されたものだと思って安心して棺桶を預けると死体がさらわれてしまうので、霊柩車に棺桶を乗せる前に必ず運転手が火車か否かを確認すべし。注意点として、決して火車の駆る霊柩車の助手席には乗らないこと。代わりに灼熱地獄に放り込まれることになる。しばしば妻子持ちの場合がある。

## 陽章之二

「なあ貴君、貴君は妖怪であろう。」

近くを通った人が心底憐れんだ眼を私に向け、関わらないようにと足早に去っていった。

しかし私は一切省みない。なぜなら私は人々を妖怪たちの魔手から救い出すという重大な使命を担っているからだ。ついでに印税も入ればなおよい。

水無月。私は例のごとく、図鑑のネタを探して町をさまよい続けていた。ここ二カ月ほどで、我が妖怪図鑑の項目はそれなりに増えた。基本的に三日坊主である私がこれほどまでに一つのことに集中するとは、喜ばしい進歩である。進歩と言えば、我が家の家事手伝いのことも報告しておこうと思う。

当初は味噌汁に味噌を入れないといった暴挙を行った彼女であったが、頭脳派を自称するだけあって私が家事を教えると、スポンジのごとくその知識を吸収していった。近頃では創作料理を作りだすほどである。きっとその頭をしばれば知識があふれ出してくることだろう。

さて、妖怪探しである。ここ二カ月でわかったことは、どうも狐と出会ってから私の頭には妖怪アンテナがついたらしい、ということだ。近くに妖怪がいれば、その気配から感知できるようになったのだ。おかげでネタを探す分には、すこぶる便利である。

その妖怪アンテナが、近く建設中のビルの付近を通過した時に反応した。危険な妖怪でないことを祈りながら、そつと目を向ける。

それはビルとビルの間にある脇道に、ぽつんと佇む看板であった。

危険！通行禁止、といった文句とともに、工事作業員がこちらに向けて手を広げている絵が描かれている。完膚なきまでに、看板である。

私は自身が看板に話しかけるほどに、話し相手に飢えている寂しいやつではないと自負している。しかし、今までに妖怪アンテナが誤作動を起こしたことはないことを考えると、一応話しかけてみるべきなのだろう。

冒頭に戻る。

「いいや、断じて違う。」

喋りやがった。人型と看板との初のコミュニケーションが行われた瞬間である。一体どこから声を出しているのだろうか。思わず隠されたマイクやテープレコーダがないか、足元を探す。特に何もなかった。

「おいお前、話しかけておいて、何故下を見ているのだ。人と話すときは目を見て話せ。」

看板に注意された。これも恐らく世界初だろう。しかし今こいつ自分のことを人と言わなかったか。それに目を見て話せと言われても、どこが目であるのかわからない。とりあえず、描かれた作業員の目を見ながら会話を続ける。

「失礼した。実は私は近くに妖怪がいればわかる、という力を持っているのだが、それが貴君に反応したのだ。貴君が妖怪でないというのなら、後学のためにも貴君がなんであるか教えてくれないだろうか。」

「俺が何者が聞く前に、お前が名乗れ。最低限の礼儀だぞ。それに、妖怪など見つけてどうするつもりなのだ。」

看板が声を荒げる。外見上変化はないが、どうやら怒っているらしい。どうやらかなり礼儀にうるさい看板のようだ。素直に謝っておくべきだろう。

「重ねて失礼した。私は佐野征十郎という。妖怪を探しているのは、私が現代妖怪図鑑を執筆しているからだ。」

「また妙なものを作っているのだな。だが残念ながら、俺は妖怪などではなく、ただの塗り壁だ。」

さらっと自分の正体をいう看板もとい塗り壁。そして私の脳みそが確かなら、塗り壁は妖怪のはずである。それも割と有名な。

塗り壁は通行人の行く先に立ちはだかると謂われる妖怪である。塀に挟まれた小道を一人で行くと、真つすぐな道であつたはずなのに曲がり角が現れ、その曲がり角を曲がってみるとまた新たな曲がり角が現れる。不審に思つて壁を調べてみると、塗り壁であつた、という逸話が残っている。

「塗り壁は妖怪であると思うのだが。」

「塗り壁は塗り壁だろう。何を言っているのだ。」

頭が痛くなつてきた。この塗り壁どうやら頭があまりよくないらしい。あるのかは知らないが、こいつの脳みそはきつと皺のない、卵のような脳みそだろう。もう面倒だから、塗り壁は妖怪か、という話は置いておこう。

「塗り壁とは、その名の通り壁のような姿をしていると思うのだが、何故貴君はそのような看板のごとき姿をしているのか教えてくれな  
いか。」

「よくぞ聞いてくれた。この姿は俺たちが考えに考えた先に見出した、究極の形なのだ。」

何やら大げさな前振りとともに、喜々としてその姿に至った経緯を話したす塗り壁。どうやら長い話になりそうだ。私は質問したことを後悔した。

「お前は俺たちが道を塞ぐとき、ただ道の真ん中で突っ立っているだけでよいと考えているかもしれないが、それは大きな間違いだ。人間に正体を看破されぬように、周りの壁の高さに合わせて背を伸ばしたり、周りの壁の模様と自分の体の模様を同じにしたり、広い道を塞ぐために体を横に伸ばしたりといった細かい技術が要求されるのだ。これがなかなか辛い。そこで俺たちが考えたことは、どうにかして塀に化ける労力を減らすことができないか、ということだ。そこからは試行錯誤の日々だ。」

塗り壁の話し方に熱が入ってきた。対する私は冷めている。もし私と塗り壁が窓ガラスがあつたとしたら、あまりの温度差に結露することだろう。

「多くの塗り壁が、新しい方法を試しては散って行った。俺たちはそれでもあきらめなかった。あえて道を塞がないでみたこともあった。どうか通らないでくださいと人をお願いしたこともあった。そして五百年の時を経て、俺たちは最善を見つけたのだ。」

暑苦しい。六月の蒸し暑さも相まって、塗り壁の話が終わる前に私の脳みそのほうが先にとろけてしまいそうだ。そうなれば世界の損失である。早く話し終われ。

「昔と比べて随分様変わりした世の中で、俺たちは現代人が色々な

ルールの下に生活していることに目を付けた。そして考えたことは、通ってはならないというルールを人間に課すものに化けることであった。これならば、あらかじめ一つのものに化けておけば、後は細かい調節をせずともいつでもどこでも道を塞ぐことができる。そしてついに俺たちがたどり着いた結論は、工事現場の通行禁止の看板だったというわけだ。」

ようやく話が終わっただけ。かれこれ三十分、私は看板に一方的に話しかけられ続けていた。よく考えたら、何故私はこいつの話に律儀に、最後まで聞いてしまったのだろう。貴重な時間を溝に投げ捨てた私の気持ち、推して知るべし。

内心イライラしていた私は、この看板にいやがらせをすることにした。

「どうだ、俺たちがこの姿にたどり着いた理由、よくわかっただろう。素晴らしい考えたと思わないか。」

「ああ、確かに一見その姿は完璧に思えるな。だが、その姿には致命的な弱点がある。」

「なんだと、俺たちの五百年を侮辱するつもりか。この姿は完璧だ。弱点があるというのなら言ってみろ。」

言葉で伝える代わりに、おもむろに私は塗り壁の横を通り過ぎようとする。

「おい、何をしている、まさかこの道を通るつもりなのか。ここは通行禁止なんだぞ。危ないんだぞ。」

「それは貴君が勝手に決めたことなのだろう。私の家はこちらから帰ると近いのだ。その姿の弱点は、正体がばれてしまったら最後、人の通行を防ぐ術はないことだ。なぜなら貴君は看板だからだ。昔のように、道いっぱいに体を広げて塞いでいれば、正体がばれても

通行を防ぐことはできただろうな。」

「よせ、この道は本当に危険なんだ。」

騙されるものか。私はニヤリと笑って看板の横をすりぬけた。いい気分だ、一杯くわせることができた。楽しんで道を塞ごうとした報いである。

「危ない、避ける。」

私がビルの隣の脇道を歩きだすと、唐突に上から大きな声が降ってきた。

反射的に上を向くと、建設中のビルからちょうど私の頭上に向けて巨大な鉄骨が落下してくるのが見えた。道幅的に、避けることは叶わないようだ。

私に鉄骨が直撃する寸前、「忠告はしたぞ」という声がした気がした。

### 陰章之三

「おかえりなさいませ、佐野様」

玄関の開く音が聞こえたのだろう。同居狐の家事手伝いがなぜかうれしそうな声で私を迎える。そんなに私の帰りが待ち遠しかったのか。

「ああ、ただいま。どうした、目が皿のようになっているぞ。」

「どうしたと聞きたいのはこちらです。服が血塗れではないですか。お怪我はないのですか、自殺未遂ですか、それとも誰かぶち殺したのですか。逃亡されますか、自首なさいますか。私は罪を償うべきだと思いますが、逃げるといふのならお手伝いしますよ。」

「落ち着け、動転しすぎだ。貴君はどうも刑事事件に持つていきたがるな。これは自殺でも殺人でもなく、ただの事故だ。」

「なるほど、事故に見せかけるんだね。それなら僕も協力しよう。」

ああ、興奮してきた、まるでミステリー小説の世界じゃないか。さあ佐野、早く現場に案内してくれよ。一体誰を殺めてしまったんだい。」

狐と私しかいないはずの部屋で第三者の声がした。それも随分とふざけたことを言っている。部屋の隅に目を向けると、幸運を運んでこなさそうな座敷童子がニヤニヤと笑っていた。

「大変だ、狐。私の妖怪アンテナが狂ってしまった。座敷童子がいるというのに全く反応しない。このままでは図鑑の作成に支障がでるぞ。」

「酷い言い草だな、僕は人間だよ。それにそんな口を聞いていいのかな。もう君の出席回数を誤魔化すの、やめちゃおうかな。」

「悪かった、冗談だ。しかし何故そんな隅っこにいるのだ、堀田。」  
「いや、彼女に常に自分とは限界まで距離をおくように、と言いつけられてしまったね。」

「貴君一体何をしたのだ。」

「少しスキンシップをとろうとしたんだが、嫌われてしまったようだ。」

こいつは私の通う大学の同じ学部に所属している友人で、堀田という。身長が低く、童顔であるため、しばしば座敷童子であると勘違いされることがあるが、その正体は齡二十歳の人間である。

しかし、こいつは女と見れば誰彼構わず手を出すような奴ではなかったはずだ。それに、二人は春に一度会っている。そのときは狐も、特別堀田を嫌っている様子を見せていなかったが。

「ところで佐野、君は罪を犯したね。」

「何を言う、私は生まれてこの方、罪を犯したことなどないぞ。」

まさかどこぞの一神教みたいに、原罪がどうのこうの言いだすわけでもあるまい。

「いいや、君は大きな罪を犯した。僕に彼女のことを黙っていたことだ。」

「それについては説明しただろう。彼女は私の従妹で、彼女の両親がエロマンガ島に旅行に行っただけで行方不明だから、私がしばらく預かっているのだと。」

「あれは冗談ではなく、本気で誤魔化そうとしていたのか。僕は今その事実には驚いているよ。来世はもう少しまともな脳みそを搭載するべきだね。」

そこまで言うか。まあ自分でも苦しい嘘だとわかってはいたが。

だがこいつに、本当は狐です、などと言う訳にはいかない。

「なぜ彼女が妖怪であることを黙っていたんだい。」

「おい狐、どういふことだ。」

思わず平生の口調を崩してしまった。なぜ堀田にはれているのだ。私は狐の顔を恨めしげに睨む。対して狐は困惑した顔をしていた。

「いえ、佐野様が以前に再び堀田様が来たら化かして追い返せ、と仰っていたので、その通りにしようとしたのですが。」

堀田を、化かすだと。私は本当にそんな指示をしたのか。だとすれば私は底無の阿呆だ。

「私なりの恐ろしい姿に化けて出迎え、追い返そうとしたところ、堀田様が急に私に抱きついてきたのです。目が血走っていて、私の姿より恐ろしかったです。」

そうなることはわかりきっているのに。何を隠そう、堀田は生粋の妖怪好きなのだ。その妖怪への愛は留まるところを知らず、偏執的とすら言えるレベルにまで達している。何しろ、私と初めて会ったときに吐いた言葉が、「君はでいだらばっちなのかい。もしそうなら僕と友達にならないか。」である。

高すぎる上背を気にしていた私は、いたく傷ついたものだ。

「驚いたよ、まさか君が妖怪と同棲しているだなんて。どうして教えてくれなかったんだ。君は僕が妖怪に遭いたがっていることを知っているだろう。」

「ああ、顔を会わせるたびに似たようなことを聞かされれば、どんな奴でも頭の中に刷り込まれてしまっただろうな。もう少し頻度を下

げてくれ。」

「だったらどうして教えてくれなかったのさ。返答によっては訴訟も辞さないよ。」

「どういった内容で訴えるつもりだ。教えなかった理由は単純だ。教えたが最後、貴君は我が家に毎日のように入り浸るようになるだろうからだ。」

「そ、そんなことない、よ。」

目が泳いでいる。ここまであからさまな演技をするということは、肯定と捉えていいだろう。

「まあ、ばれてしまった以上は仕方がない。うちに来るのは構わないが、騒がしくないこと、多少は日を空けること、手土産を持ってくること。この三つは守ってもらうぞ。」

「待つて下さい、佐野様。もし佐野様がいないときに、堀田様が来たら私はどうなるのですか。見てください、あの眼鏡の奥の血走った眼を。性犯罪者と同じ目をしています。」

狐が会話に割り込んでくる。自分の身の安全がかかっているので必死だ。

「安心しろ、狐。堀田は変態であるが紳士だ。乱暴はしないはずだ。乱暴は。」

「佐野の言う通りだよ、狐さん。僕は色々と質問させてもらいたいだけだよ。色々とね。」

「不安すぎます。安心できる要素がありません。」

狐が涙目になったので、堀田にくれぐれも狐に対して不快な真似はしないようお願いさせておいた。これで大丈夫だろう。たぶん、おそらく、きっと。

「さて、今日のところは帰るよ。僕は君と違って真面目な学生だから、時間がいくらあってもたりないほどに忙しいんだ。またね、狐さん。今度は二人きりで、じっくりと話そう。じっくりと。」

「ああ、早く帰るがいい。また来る時は手土産を忘れるなよ。」

「二度と来ないでください。お願い致します。」

狐が切実な言い終える前に、堀田は玄関の扉をさっさと閉めてしまった。狐は小刻みに震えている。チワワかお前は。

「ところで佐野様、あのまま帰してもよかったのですか。」

狐が不意に真面目な顔になる。どういう意味だろう。

「何だ、無事に帰すのは納得がいかないとしても言いたいのか。あいつは変態であるが、死なねばならないほど重度のものではないぞ。」  
「いやそうではなく、怪異と認識した上で私と遭ったということは、あの方も今後は多くの怪異に見舞われることになりますよ。」

なんだ、そんなことが。

「見ただろう。あいつは妖怪フェチなのだ。怪異に見舞われるようになったなどと、やつが知ったら小躍りするだろうな。」

「そんなものですか。確かにあの方の愛情が向けられれば、いかに強力な怪異でも吐き気を催して逃げ出しそうですが。」

「貴君、本当にやつのが嫌いなのだな。」

塗り壁は変化するための労力を極限にまで減らした結果、工事現場の看板と化していた。本物の看板と差異がないため、外見上は見分けることは難しいが、声をかけると返事をするため、偽物を判別するのは容易である。ただしなぜ看板になったかを問うと長話を始めるので、全て聞いてやろうとすると結果的に足を止められることになる。なお、なんらかの忠告をされたら素直に聞くべし。

### 陽章之三

「なあ貴君、貴君は妖怪であろう。」

親と思われる女性に手を引かれた子供が私を指さし、「あれなにー。」と心ない言葉を放つ。女性は子供の目を手でふさぎ、足早に立ち去って行った。しかし私は断固として自分の行いを改めるつもりはない。なぜなら私には、印税を得て自らの将来を確かなものにするという目標があるからだ。ついでに人々を救うことができればなおよい。

神無月。私は例によって例のごとく、凶鑑のネタを探すべく町をふらついていた。現代妖怪凶鑑は着実に完成に近付いている。その項目の数は、あと少しで百鬼夜行を行えるほどになっていた。順風満帆である。

近況を報告しようと思う。あれから堀田は毎週一回の頻度で我が家を訪れているらしい。

らしい、というのも堀田は大抵私が不在のときに限って我が家を訪れるからだ。私が自宅で堀田に会ったのは、実質月に一度程度である。

狐曰く、「あれは絶対に、佐野様が出て行くのをどこかから確認していますよ。」とのことだ。ちなみに今のところは、狐に被害らしい被害はない。せいぜい気味の悪い目つきで見つめてくる程度らしい。どちらが妖怪だかわかったものではない。

なお、諸兄らの中に私の単位の心配をしてくれている物好きがいるかもしれないので、一応報告しておく。試験前に行った連日連夜のデスマーチにより、私は必修講義の全ての単位を取得することができた。この期間でまたいくつか堀田に貸しを作ってしまったが、

やつが要求する見返りなど大体予想がつく。狐がまた涙目になる様子が目に見えかぶ。

さて、雑談はこの程度にする。今回妖怪アンテナが反応した場所は水族館である。今日は休日であるためか、親子連れの多いことが見て取れる。こんなところで妖怪が暴れだせば大惨事間違いなしだ。私は自身が、民衆を守る英雄になった気分がしたので、意気揚々と胸を張り、か弱い人々を守るために水族館に乗り込んだのであった。ちなみに入場料は大人二千円であった。

そして冒頭の仕打ちである。しかし、真なる英雄とは人に理解されずともひたすら民衆を守るために戦い続けるもの。顔をぬぐったのは痒かったからであって、決して涙が流れてきたからではない。私は目の前の悪しき妖怪に向き直る。まずはこいつに、自身が妖怪であることを認めさせねばなるまい。

「ええ、その通りよ。よくわかったわね。」

「やはり認めないか。その通りだなどと、苦しい言い訳をする。」

あれ。

「貴君今、自分が妖怪であると認めなかったか。」

「だからそうだって言ってるでしょ。で、一体何の用なの。」

図鑑の完成間近にして、新しいパターン。初っ端から認めてきたのは、こいつが初めてである。これは中々手ごわいかもしれない。

「要件の前に聞きたいのだが、そんなに簡単に認めてもよいのか。今日は客もたくさん来ていることだし、正体がばれると貴君の立場が危ないのではないのか。」

「なんだ、そんなこと。周りを見てごらんなさい。私が堂々として  
いる理由がわかるわよ。」

そういえば先ほどから何か違和感があった。物音ひとつ、しない。  
あれほどたくさんの方がいたというのに。周りを見渡す。先ほどま  
で人で満たされていたはずの空間は、完全に無人と化していた。巨  
大な水槽に囲まれた空間に一人というのは、なかなか不気味なもの  
である。

「人払いの結界を張ったの。人魚にとっては必須の術よ。本来なら  
あなたもこの空間から弾かれるはずだったのだけど、あなたは何か  
妖力に対して耐性のようなものを持っているのかしら。」

さらっと正体と言う。姿からして予想はしていたが、やはり實際  
にこれが人魚であるとわかると絶望感が凄い。私は目の前のでつぶ  
りとした体をしたジユゴンを眺め、深く息を吐いた。金髪ブロンド  
や貝殻のブラジャーといった幻想は、今砕かれた。

「どうしたの、ため息なんかついて。私の体はため息が出るほどに  
悩ましいのかしら。」

「ああ、うん、そうだね。」

その体型に欲情するのはドラム缶フェチくらいだろう、と言いた  
かったが、さすがに女性に対して失礼であるので自重した。男子諸  
君、紳士たれ。

「そろそろあなたの用件を教えてくれない。結界を維持するのは割  
と疲れるの。」

「ああ、すまない。私は佐野征十郎という。貴君に声をかけたのは、  
私が今作成している妖怪図鑑に貴君のことを載せたいからだ。協力

してくれないか。」

ジユゴンは顔の前面にある鼻だか唇だかわからん部位をひくつかせ、私をじつと見つめてくる。どうやら悩んでいるようだ。白い尾が水槽をピタピタと打つ。

ジユゴンは三分ほど黙考した後、口を開いた。

「わかりました、協力はします。でもひとつ条件があるの。」

「ありがたい。して、その条件とはなんだ。」

「あなたが知りたいことを全部聞いたら、帰る前に私の自慢の歌を聞いてほしいの。」

「それは願ってもない。こちらから頼もうと思っていたくらいだ。人魚の歌声は、この世のものとは思えないほどに美しいと聞くからな。」

いたって順調に交渉は進む。存外協力的な態度に、こちらが戸惑っているくらいだ。

「まず気を悪くしたらすまない、と前置きしておく。人魚の肉に不老不死の力が宿っているというのは、本当か。」

「ああ、やっぱり人が最初に聞くのはそのことね。答えましょう。私たちの肉を食べると不老不死になれるのは本当。あなたも食べてみたいのかしら。」

「いいや、間に合っているよ。」

「賢明な判断ね。不老不死とはいっても、それは人間の考えているような都合のいいことじゃないの。あくまで死なないだけ。例えば、不治の病にかかったとしましょう。普通の人間は、いたって普通に死ぬでしょうね。けれど不老不死になったものはそうはいかない。明らかに人間であれば死ぬ段階まで病気が進行しても、決して死ぬことはない。常人ならば死んでいるであろう苦しみを、永遠に味わ

い続けなければならない。人魚の肉を食べたいと言うものは、よほどの自信家なのでしょうね。永遠に自分が健康体でいられるとも思っているのかしら。たかが百年も満足に生きられないくせに。」

ジュゴンの眼差しはどこか遠くを見つめていた。人間の欲望のために狩られていった仲間たちと、その肉を食った者たちの末路に思いを馳せているのだろうか。

「では次に、なぜ貴君がここにいるのかを聞きたいと思う。人魚として捕まったわけではないのだろう。もしそうだとしたら、人間が貴君を放っておくはずはないからな。」

「ええ、私はジュゴンとしてここに来ました。それもわざと捕まっ  
てね。」

「わざと。それはまた、何故。」

「疲れちゃったの。この科学信仰がはびこる時世でも、いまだに人魚の肉を求めている者たちはいる。結界を張っておけば、そういった連中が近寄ってくることはないけど、寝ている間は張り続けることはできないし、起きている間も四六時中結界を維持していたら、気の休まる時がない。それならば、いつそ人間社会の中に自ら飛び込めばいいと思ったの。肉を求めている連中は、人魚に対して妙に神秘的なイメージを抱いているから、まさか自分たちの求めている存在が水族館で見世物になっているなんて、想像もしないでしょう。ここは人間の集まる場所だけど、私たちにとっては安住の地よ。」

人魚が語り終える。私は彼女に対して、何の言葉も返すことができなかった。

彼女の言葉があまりに強がりに満ちていたから。この場所が安住の地と彼女は言ったが、そんなはずはない。いかに危険とはいえ、誰が望んで住み慣れた母なる大海から、こんな水槽の中へと来たが

るだろうか。恐らく彼女は、自分の意思でここに来たのではない。先ほどの話も、自分を納得させるためのものなのだろう。それに、彼女自身気付いているはずだ。自分が一般的なジユゴンよりも寿命が圧倒的に長いことを。人間がそのことに気づくのはそう遠くない未来だろう。その時彼女は。

「質問の時間は終わったようね。そろそろ私の自慢の歌を聞いていただけるかしら。」

「ああ、ぜひ歌ってくれ。」

静謐な空間に歌声が響く。その旋律は目の前のジユゴンが歌っているとは思えないほどに美しく、流麗で、そして悲しかった。歌の内容がどのようなものかは、恐らく人間が理解できるものではない。ただ、望郷の歌である、ということはなんとなくわかった。

歌が止む。

「感想、聞かせていただけ。」

「がぼがぼがぼ。」

「ありがとう、そう言ってくれると嬉しいわ。」

「がぼがぼがぼ。」

「どこって、水槽の中だけれど。」

「がぼがぼ。」

「私は歌っていただけ。あなたが勝手に入ってきたのよ。」

忘れていた。人魚の歌。数多の男を惑わす、幻惑の旋律。

「ごめんなさい、あなたに恨みはないけれど、私はもう少しだけ生きていきたいの。そのためには私の正体を知っているあなたが生きていると、不味いでしょう。」

必死に水を掻いて、水面を目指す。その私の足に真っ白な腕が絡んできた。

「いけないで、ここで一緒に歌いましょう。」

幻想であつたはずの金髪ブロードが、そこにいた。

## 陰章之四

「おかえりなさいませ、佐野様」

出迎えの言葉をかける狐はなぜか狐の面を被っている。

「どうしたのだ、面など被って。何か妖怪らしいことでもやらかす気か。」

「それならもうしましたよ。」

狐はそう言つて私の足元を指さす。足元を見やると堀田が木の葉にまみれて倒れていた。

ついに殺されたかと思つたが、薄気味悪い笑い声をあげているのでどうやら生きているようだ。足の先でつついてみる。

「ふふふふ、佐野、見てくれよこの様を。妖怪に、それも妖術を使われて襲われてしまった。」

「ああ、災難だったな。自業自得なのだろうが。」

「幸せすぎる。僕もういつ死んでもいいや。」

「ただでさえ変態の上に、マゾヒストなのか。」

堀田の知りたくない一面をまたひとつ知ってしまった。こいつはもう救いようがない。こんなやつと友人であると近所の住民に知られれば、私まで同類扱いされてしまう。さっさとお帰り願おう。

「堀田、今日の私は狐とごろごろするので忙しい。悪いが今日のところは帰ってくれんか。」

「うらやましいな、ちくしょう。まあ待ってくれよ、今日は狐さんじゃなくて君に用があつて来たんだよ。」

「聞く義理はない。帰れ。」

「僕が試験勉強を手伝わなければ、君は今頃留年確定だったろうね。」

それを言われると弱い。どうせ堀田の頼みなどろくでもないことなのだろうが、聞くだけ聞いておくとしよう。

「何だ、狐ならばやらんぞ。こいつはうちの大事な家事手伝いだ。」

「さすがにそんなことは言わないよ。君にちよっと、この紙にサインをして欲しいだけさ。」

そういつて堀田は一枚のA4用紙を差し出してきた。名前を書く欄がいくつか並んでいる。

「創部届。貴君、何か部活を作るのか。」

「ああ、表面上は歴史民俗研究部、という部だ。」

堀田は表面上は、という部分を強調して言った。少なくとも歴史民俗を研究する部ではなさそうだ。

「表面上とはどういうことだ。」

「部っていうのはサークルと違って、そう簡単に作れるわけではないのだよ。表面上だけでも真面目な目標を持っていることをアピールしなければ、中々受理されないんだ。」

「ならばサークルで良いではないか。それに私が聞いているのは、その部を作って何をするつもりなのか、ということだ。」

「部でなければ部費が出ないんだ。目的についてはこれから説明するよ。君も部員になるんだからよく聞いておいてくれ。」

まだ入部するとは言っていない、という意見はきくと聞き届けら

れないのだろう。

「そんなに嫌そうな顔するなよ。君にメリットがないわけじゃない。我が部の目的は、全国を巡って妖怪を探すことなんだ。君は妖怪図鑑を作るためのネタが手に入る、僕は全国の妖怪へ愛を伝えることができる。どうだい、入部してみないか。」

確かに、悪い話ではない。妖怪図鑑は百鬼分の情報が揃ったなら、一旦完成とする予定であったが、もし間違って売ってしまったら第二版のオフア―が来るかもしれない。そのために妖怪の情報を集めておくのも悪くない。

「いいだろう、入部はしてやる。しかし部活を作るにも人数がいるのではないか。私に堀田、他に誰か当てはあるのか。」

「まあその辺は適当に見つけておくよ。君はそれにサインをしてくれればそれでいい。」

どうもこいつ何か隠している気がする。どうせ聞いたところで教えてくれないだろうから、深くは追求しないが。

「ほら、これでよいのか。」

「うん、ありがとう。助かるよ。」

私は創部届にサインをし、堀田に手渡す。堀田は無駄に爽やかな笑みを浮かべて受け取ったが、なぜか用紙を見てその笑顔が凍りついた。

「どうした、何か不備でもあったのか。」

「いや、初めて佐野の書いた字をまじまじと見たんだけど。」

字がどうかしたのだろうか。堀田は渋い顔で用紙を見つめている。

「君って字が恐ろしく汚いね。」

あ、今わりと深く心に来た。

「な、何を言っているのだ。私の書いた字が汚いはずがないだろう。」

「いや、これは酷いよ。汚いというよりもむしろ怖い。文字を見て怖いという感想を抱いたのは、生まれて初めてだよ。行書とか草書とかが比にならないレベルで、字が崩れている。」

「そんな馬鹿な。狐、見てくれ。私の字は汚くなんかないよな、な。」

「うわあ。」

より深く傷ついた。狐の本気で引いた顔を始めて見てしまった。

「この三角形の鉛筆をあげるから元気だしなよ。」

堀田が持ち方の練習をするための鉛筆を差し出す。なんでそんなものを持ち歩いているのだ。とりあえず奪って折っておいた。

「まあ、今のは冗談だとしても、字の練習はしておいて損はないと思うよ。それじゃ、僕は部員探しを始めるから一旦帰るよ。君もたまには大学に来なよ。」

「余計なお世話だ。字の練習だけは考えておいてやる。」

騒がしい奴がようやく帰った。やっとくつろぐことができる、と思ったところで狐が声をかけてきた。

「佐野様、実は佐野様がお帰りになってからずっと気になっていたのですが、なんだかえらく濡れていませんか。」

くしゅん。指摘された瞬間にくしゃみが出た。そういえば全身がびしょ濡れであったのだ。風邪をひかぬうちに着替えねば。

「もう、仕方ないですね、いい歳して水遊びでもなさったのですか。洗濯しますから服を貸して下さい。」

「ああ、すまないな。頼んだ。」

狐は私の服を受け取ると、てきぱきと洗濯機を回し始めた。もう一通りの家事はすっかり覚えており、私よりも上手にこなすくらいになっている。狐の容姿は幼いはずなのに、その姿は幼少のころに見た母に重なった。

「なあ狐、貴君に家族はいたのか。」

思わず問うていた。私がそんな質問をするのが意外だったのか、狐は少し驚いた顔を見せた。

「どうしました、藪から棒に。私の家族なら、両親と姉が二人、妹が一人いました。独り立ちしてからは、ずっと会っていませんが。」  
「そうか、それなりに大家族だったのだな。家族仲はよかったのか。」

狐が眉根に皺を寄せ、私に疑わしげな視線を向ける。

「まさか、家族の元へ帰れなどというつもりではありませんよね。言っておきますが、まだ恩返しは済んでおりませんし、今家族がどこにいるのかもわかりませんよ。」

「いや、そういう意味でなく、純粹な興味だ。教えてくれないか。」

狐はしばらく私に疑わしげな視線を向けた後、ようやく納得したのか、頬に手を当てて考え始める。

「うーん、そうですね。悪くはありませんでしたが、特別いいというわけでもなし。一般的な人間の家庭を想像していただければ、そう大差ないと思いますよ。餌を取って来てくれたり、夜が恐ろしくて眠れない日は寄り添って眠ってくれたり。餌を取る訓練をするときは、随分厳しかったものですけど。一匹仕留めるまで帰ってくるなど言われたり。」

狐の口から語られる、家族に関するエピソード。それを聞いている私の胸中に渦巻いているのは、羨望と嫉妬であった。

「こんなところですかね、面白くもない話だったでしょう。佐野様。」

狐に呼びかけられて、我に帰る。どうやら平生の思考を失っていたようだ。気をつけなければなるまい。

「あ、ああ、すまなかつたな、妙なことを聞いて。貴君は幼いころから、お転婆だったらしい。」

「失礼ですね。私は小さなころからずっと淑女でしたよ。」

私の感想がお気に召さなかったのか、唇をとがらせてすねてみせる狐。だが、その顔はやがて悪戯を思いついた子供のような顔に変化する。嫌な予感がする。

「ね、佐野様のご家族のことも聞かせて下さいよ。」

やはりそうくるか。だが今の私に、そのことについて話す覚悟はない。私の家族のことについて話すということは、必然的に私のことも話すことになるから。

「すまないが、今は勘弁してくれないか。」

「そんな、ずるいですよ。私ばかり話して佐野様が話さないだなんて。」

「頼む。」

狐がきょとんとした顔で私を見る。私が真剣に拒否していることに気づいたらしい。

狐はしばらく追求するか否か悩んでいたようだったが、結局押し黙った。

「すまない、いつか必ず話す。だから今は、まだ。」

私の覚悟が決まる日まで。

# 現代妖怪図鑑 項目ノ八十四 人魚

人魚とは人間の上半身に魚の下半身を持つ妖怪で、その肉に不老不死の力が宿っていることで有名である。しかし、現代の人魚の外見は完全にジュゴンそのものであり、その肉からも不老不死の力は失われているようだ。もはや人魚を探すことにメリットはないが、男を海中へと誘う美しい歌声は健在であるようなので、自殺をする分には人魚を探すのでもいい方法かもしれない。

## 陽章之四

「なあ貴君、貴君は人間であろうか。」

鏡の向こうの私は何も言わず、ただ私を見つめている。

印税などいらない、世の人の役に立ちたいわけでもない。

ただ、家族が欲しい。

如月。その日私は妖怪図鑑のネタを探しに行くでもなく、我が家でぐだぐだと過ごしていた。掃除機をかけている狐が、邪魔だとばかりに寝転ぶ私の背を蹴る。我が家に来てもうじき一年になるこの狐、長い期間一つ屋根の下で過ごしたことで、それなりに親交は深まったものの、それに比例してなんだか私の扱いがぞんざいになっている気がする。仮にも家主なのに。

「そう思うのでしたら、普段から威厳をお見せ下さいな。そうしていただけたら、私も尊敬のしようがあるというものです。」

「それは私が悪いのではなく、私から威厳を見いだせぬ貴君の目が悪いのだ。私の行きつけの眼科を紹介してやろうか。」

「昼間に布団から頭だけ出して寝転んでいる人間に、威厳など見出せませんよ。見いだせる方こそ、即刻眼科に行くべきです。では佐野様、急ぎましょう。」

「待て、なぜ私が行く流れになっているのだ。視力検査ならひと月ほど前にしたばかりだぞ。」

「いえ、私が連れて行くこうとしているのは学び舎ですよ。期末試験が近いでしょう。また堀田様に泣きつく羽目になる前に、計画的に勉強すべきです。」

「睡眠学習とは良いものだ。」

狐がまた私の背を蹴る。今度は先ほどよりも強めに。思わず狐を睨みつけると、狐はため息をつき、自らの両掌を肩の高さにもってきて、心底呆れた、といった様子で首を左右に振った。欧米か。

「ナンセンスです。ベリーバッドですよ、佐野様。」

「ルー大柴だったか。」

狐との会話は、楽しい。共に過ごす時間が心地よい。

だからこそ、これ以上隠しているわけにはいかない。それは、狐と過ごすこの時間を嘘にしてみうことになるから。

例え、それにより、今日彼女と決別することになったとしても。

また、失うことになったとしても。

「なあ狐、実は話したいことがあるのだ。」

狐は私の言葉の中に、真面目な声色を感じ取ったらしい。美しい眉をひそめ、急に態度を変えた私を訝しげに見つめる。

「どうなさったのですか、急に。まさかもう留年が確定しているとか。そういった話なら、私に言われてもどうしようもありませんよ。」

「ああ、心配するな、その辺りはどうにかする。これからするのは昔話だ。」

「昔話、ですか。」

「そう。」

私の、昔の話。

佐野清十郎。彼は極一般的で、常識的な家庭で生まれ、そして彼もまたそのようにして育てられた。

祝福されて産まれて、両親からの愛情を一身に受けて育ち、幸福

のうちに成長する。

そんな彼の人生に転機が訪れたのは、彼の祖父が世を去ってからであった。

佐野の祖父は、広大な敷地を持つ日本家屋に一人で住んでいた。祖父は明朗快活を絵に描いたような人物で、孫である佐野に甘かった。

そんな祖父を佐野も好いていたが、その日本家屋の放つ、どこか異様な雰囲気から、祖父の家を訪ねることは嫌がった。

祖父の死因は、あまり自然といえるものではなかった。玄関から直進して突き当たる部屋、ちょうど屋敷の中心となる所で、自ら首を絞めるようにして死んでいたらしい。

争った形跡もなく、家を荒された跡もない。結局警察には自殺として処理されたそうだ。

自分の首を絞めて自殺するなど、できるはずもないのに。

その日当時六歳の佐野は、両親とともに祖父の遺品の整理を行うために、祖父の家を訪れていた。

祖父の思い出の品となるものは、棺とともに焼いてしまったため、母屋の中には冷蔵庫やテレビといった電気機器程度しか残っていなかった。

次に両親が向かったのは、祖父の家の一角にある古ぼけた蔵であった。

佐野はその蔵の扉が開いたときに、何か異様な悪寒が走ったことを覚えていた。

蔵の中は薄暗く、外は昼間であるのに、まるでここだけ夜が訪れたようであった。

薄暗闇の中、両親は持参した懐中電灯を持って、入口付近から品を調べていく。そんな中、佐野の目を奪ったのは、蔵の最奥の棚に鎮座する小さな壺だった。この蔵の中で、最奥の棚に並んでいる物など見えるべくもないのに、なぜかその壺だけは暗闇に浮かびあが

って見えた。佐野は引き寄せられるようにして歩いた。

最奥の棚にたどり着き、壺を手に取り、おもむろに封を開く。中に入っているのは、どうやら液体のようだった。壺を顔に近づけ、その液体の香りを嗅ぐ。

その瞬間、佐野は正気に戻り、壺を床へと叩きつけた。

幼いながらも香りを嗅いだ時点で、本能的に理解したから。それが此岸のものではないと、人の触れてよい領域のものではないのだと。

叩きつけられた壺は割れ、中の液体は逃げるようにして床へと浸潤していった。

何かが割れる音を聞きつけた両親は、すぐに火のついたように泣きじゃくる佐野のもとへと駆け寄ってきた。

しかし、両親は佐野がふざけていて壺を割ってしまい、それに驚いて泣いているのだと理解したらしく、結局佐野の感じた脅威は両親に伝わらなかった。

「竹取物語を知っているか。竹取の翁が光る竹を切って云々、というやつだ。」

「かぐや姫は月に帰る前に不老不死の妙薬を、帝と翁夫婦の両方に渡したとされる。」

「帝に渡されたものは、富士の火口に捨てられたとされるが、翁夫婦に渡された薬は所在不明なのだ。」

狐は何か言いたげに口を開いたが、制止する。

「まあ待て、話を最後まで聞いてからでも遅くはない。」

その後、佐野は何事もなく七歳を迎え、小学校へと入学する。

何事もなく、とはいっても佐野は自身の体に違和を感じていた。

例えば今まで転べば感じていたはずの痛み。それが全くなくなって

いた。確かにすりむいたはずなのに、実際は傷ひとつない。

佐野は子供心にそれが異常だと感じていた、それ故その違和感を決して口外しようとはしなかった。

しかし、そんな佐野の努力は、最悪の形で無駄になった。

その日、佐野は両親とともに近所の公園を訪れていた。父親が家族サーブスのつもりで連れてきたのだらう。佐野と父はキャッチボールを始める。

続けるうちに慣れてきて、簡単なボールなら確実に取れるようになる。父はそれに応じて、少し取りづらい位置に投げる。

何度か繰り返し返したところで、佐野はボールを取り逃す。ボールは公園を転がり出て、道路で静止した。

佐野は両親からの静止も聞かずに、ボールを拾うために道路へと向かう。

そして、道路を横切るトラックが佐野の体を吹き飛ばした。

母が悲鳴をあげる。父が絶句し、立ち尽くす。それだけ今、目の前で起こった光景が信じられなかったから。自分たちの息子が吹き飛ばされ、人の形を成さなくなった光景を認めたくなかったから。トラックはそのまま走り去り、両親は茫然として息子だったものを見つめる。

そして、目撃する。

肉塊がひとりでに動き、集まろうとしている。元々人であったとわからないほどに潰れていたそれらは、早くも密着し、結合し、再び人としての体裁を成そうとしていた。

母が再び絶叫する。今度は驚愕からではなく、恐怖から。

何事もなく、当然のように無傷で立ち上がった佐野を見る両親の目は、まるで拳銃でも突き付けられているかのように、おびえてい

た。

その日から、佐野と両親は他人となった。口もきかず、目も合わせず、触れ合うこともない。佐野の持つ超常を受け入れるには、彼の両親はあまりに一般的で、常識的過ぎた。

ただ、両親は佐野を家から追い出そうとはしなかった。自らの息子を家から追い出すという行為は、世間的に見ていかに非常識であるかを理解していたから。

ただ一緒に住んでいるだけ。佐野に声をかけざるを得ない時は腫れものを触るようにして。家にいるときは、自室から出ないようにと言いつけられた。そこにおよそ家族の温かみと思えることは存在しなかった。

最初から両親がこのような態度であつたのなら、佐野は特に何も思うところはなかっただろう。ただ、彼は生まれてからの六年間で、両親からの愛を知ってしまったている。

その事実が彼自身を苦しめる。なぜ二人はこんなにも変わってしまったのだろうか、自分が何か悪いことをしたのだろうか、と。

佐野は両親が喜びそうなことは、考え付く限りすべてやった。いい子になれば、また両親が自分に優しくしてくれる日が来るかもしれないから。

ただそれは両親からすれば、化け物が自分たちの歡心を買って取り入ろうとしているようにしか見えなかったようだが。

「この部屋はな、座敷牢なのだ。」

両親と、自らを隔絶するための檻。ここでの私は自由だが、本当に欲しいものは決して手に入らない。

「両親が私に対して出した条件は、こうだ。大学には行かせてやるから、卒業したら二度と顔を見せるな。」

「別に大学に行きたかったわけではない。ただ、もう私たちが家族に戻るのとは不可能だと思ったから、離別するには丁度良いきっかけだと思ったのだ。」

「私はただ徒に人生を消費し、今に至る。」

「両親を恨んでいるわけではない。誰だってまともだった筈の自分の子供が、化け物になり変っていたら恐ろしいに決まっている。だから、恨んでは、いない。」

「私の話は以上だ。」

今までため込んでいたことを一度に話しきった。ついでに感情も全部ぶちまけたように思う。未だ何も解決していないのに、どこか清々した気分だった。

だが、その気分は狐の顔を見た瞬間吹っ飛んだ。

狐が私を見る目が、普段とどこか違う。困惑しているような、どこか怯えているような、そんな視線。それはいつかの両親を想起させるものだった。

「それで、佐野様はそのことを話した上で、私に何を求めるのですか。」

核心。そうだ、私は隠し事があって後ろめたいから話したわけではない。狐を怯えさせたくて話したわけでもない。私は、ただ。

「今の話を踏まえたうえで答えてくれ。」

私の不死性を、妖怪にすらあり得ないその異常を踏まえたうえで。

「狐、私の家族になってくれないか。」

それは懇願だった。幼子が怒った親に許しを請うような、そんな

願い。

それに対する答えは沈黙。

佐野は狐の顔を見ることができなかった。その顔が拒絶に満ちていることが予想できたから。

ああ、やはり、また駄目なのか。

「はあ。」

ようやく聞こえた声は、なぜか気の抜けたものだった。

何故、この場面でそんな声が出る。思わず狐の顔を見る。

その顔は、佐野がふざけたことを言った後に見せる、いつもの呆れ顔だった。

「阿呆だとは思っていましたが、まさかこれほどとは、さすがの私も予想していませんでした。」

「えらくもったいぶって話したので、どんな大層な秘密があるのかと思ったら。」

辛辣な言葉を吐きながら、狐はため息をついた。

「たかが死なない程度で、どれだけ凄まじい化け物になったつもりですか。たかがその程度の異常で、私があなたの下を去るなどと、本気で考えていたのですか。」

「まあ確かに、妖怪の中でも死なない、というものは存在しないでしょう。それは認めます。しかし我々にだって、腕が千切れたら生やすくらいのことはできますし、もっと強力なやつなら、頭さえ残っていれば再生できる、なんてやつもいるのです。」

「そんな中で、不死以外は何の能力も持たないあなたを、いったい誰が脅威だと思うでしょうか。思い上がりもいいところですよ、この阿呆。」

狐は言いたい放題に言いきった後、少し息をつく。勢い込んで話しすぎたのだろう。

話が途切れたところで、狐の言いたいことがまだ十分に飲み込めていなかった私は、真意を問おうと口を開いた。が、それは狐が私に噛みつくような目線を向けたので引っ込んだ。

「黙ってください。まだ私の話は済んでいません。噛みしめて聞きなさい。」

「何より腹が立つのは、あなたと私の関係が、その程度の異分子の存在で崩れ去ると考えていたことです。」

「私はあなたに救われました。解放してもらい、妖怪であるにも関わらず、住居まで与えてもらいました。」

「それからの日々は、私にとって確かに楽しい日々だったのです。四六時中暗闇の祠ではなく、昼と夜の変化を感じられる部屋、昔とは随分変わった、私の知らないことばかりの世界。そして佐野様、あなたの存在。」

「そう思っていたのは、私だけだったのですか。佐野様にとっては、その程度のことで崩れてしまう関係だったのですか。」

狐はいつの間にか、目に涙を溜めていた。その涙は美しくて、狐がたまらなく愛おしく見えた。

気付くと、私は狐の華奢な体を抱きしめていた。

「そんなことは、ない。私だって楽しかった。私にとって、大切だった。」

「私は憶病だったのだ。再び失うことを恐れ、結果貴君を傷つけてしまった。すまなかった、本当にすまなかった。」

いつの間にか、私も涙を流していた。狐が私の肩を押すので、狐

の背に回していた腕をゆつくりと離す。狐は泣き笑いのような顔を私に向けると、言葉を紡いだ。

「返事、まだでしたね。」

「ああ、聞かせてくれ。」

「私は今、佐野清十郎様に対する恩返しを決めました。それは、今後一生あなたの御側に仕えることです。雨の日も、風の日も、死が二人を別つとも。」

狐の紡ぐ言葉は柔らかに私の耳へと流れ込み、いつかの不安を溶解させる。

今なら過去の自分に対して言える。何を下らないことで悩んでいるのだ、と。

「時に佐野様、一つ聞きたいことがあるのですが。」

狐は既に泣いておらず、その顔には悪戯っぽい笑みが浮かぶばかりだった。

今ならば、どのようなからかいでも受けよう。

「何だ、狐。なんなりと聞いてみよ。」

「では。」

そう言うつと、狐はその場で立ち上がり、くるりと一回転をした。と思うと、狐の衣装はいつもの浴衣から、何か見覚えのある白装束に変じていた。

「先ほど佐野様は家族になってほしい、と仰いましたが、それは妻的なポジションでも構わないのでしょうか。」

「は。」

突然のことにて、思考が停止する私。そんな私に構わず、狐は床に指をつき、大仰な仕草で首を垂れる。

「ふつつかものですが。」

その日は昼間から晴れているにもかかわらず、雨が降った。

これは余談であるが、狐の嫁入りがある日は天気雨が降るらしい。

あくまで余談である。

現代妖怪図鑑 項目ノ百 不死人

不死人とは、不死の妙薬や人魚の肉（項目ノ八十四参照）などを食したことにより、死から解放された元人間の総称をいう。不死になった要因によつてその性質は異なり、場合によつては悲惨な永遠を歩むことにもなる。薬によつて不死人となったものは、強力な再生能力を有しているが、その身体が再生しようとする光景はしばしばグロテスクである。彼らに共通しているのは、過去も、現在も、未来もないことである。

## 今更キャラ紹介（前書き）

最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。

ここでは今更ながらこの物語のキャラクターを赤裸々に紹介していききたいと思います。

ネタバレを含むので、未読の方は読むことをお勧めしません。  
それでは今しばし、物語の残光をお楽しみください。

## 今更キャラ紹介

### 人物紹介

#### 項目ノ一 佐野清十郎

身長194cm、体重65kg。長細い。不死人。祖父の家の蔵にて、不死の妙薬と思われるものの臭いを嗅いだことにより不死化。臭いを嗅いだけだったためか、不老ではないようで、きちんと齢はとっている。だからたぶん寿命でなら死ぬことができる。

幼いころにその体質故に両親からネグレクトを受け、心の傷に。そのせいか割とさびしがり屋。

ひよんなことから狐の封印を解いてしまい、一緒に住まうことに。最終的には「家族になつてくれ」などと告白まがいのことをするが、本人にそのような意図はなかったらしい。

#### 項目ノ二 狐

身長148cm、体重40kg。結構長い間、佐野の住む町の祠に封印されていた狐。封印された理由は不明。

なぜかいつも浴衣を着ており、十五歳くらいの少女の姿をしている。頭の横に狐の面をつけている。ちなみに狐の面を被った状態は、正確には半妖化で、本来の姿は別にある。年齢は聞いてはいけない。見た目は佐野曰く、「見目麗しい」らしい。

自称頭脳派であるが、言うだけあって飲み込みは早く、既に家事の腕は佐野よりも遥かに上になった。

誰に対しても慇懃な口調で話すが、堀田のことは嫌い、というより気味が悪いと思っている。

佐野に告白まがいのことをされ、一生傍にいる、という誓いを立てる。

本人曰く、「普段見せない弱々しい姿に母性本能をくすぐられた」

そうだ。

### 項目ノ三 堀田正義

身長150cm、体重45kg。ちまっこい。最後のキャラ紹介でやっとフルネームが出た人。下の名前はまさよし、と読む。佐野の大学の友人で、異常なまでの愛を妖怪に対して抱いており、常々妖怪に遭いたいを思っていた。

堀田の二度目の訪問時、狐は全身がぬるぬるしていて、そこらじゅうから触手が生えている何かに化けて追いつ返そうとしたのだが、堀田は迷わず抱きついた。

狐に遭遇したことにより、怪異に遭うことができるようになる。ちなみに彼が妖怪に遭いたがっていたのは、愛ゆえに、というのもあるが、他にも何か目的があるらしい。

### 項目ノ四 佐野の祖父

身長189cm、体重85kg。確実に遺伝。享年六十歳。祖母とは四十歳のころに離婚している。自宅にて不審な死をとげる。豪快な人物で、佐野を可愛がっていたが、死ぬ一年ほど前から塞ぎこみがちになり、家からもあまり出ようとしていなかったようだ。不死の妙薬があつた蔵の持ち主でもあるが、何故彼がそれを所持していたかは不明である。

## 今更キャラ紹介（後書き）

以上でこの物語は完結します。  
ご愛読ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0670m/>

---

現代妖怪図鑑

2010年10月12日11時10分発行